

# 仙台陣屋かわら版

第七十二号

(平成二十三年三月号)

HP: <http://www.town.shiraoi.hokkaido.jp/ka/jinya/> Mail: [jinya@town.shiraoi.jp](mailto:jinya@town.shiraoi.jp)

〒059-0911 白老町陣屋町六八一 TEL&FAX 0144-851666 仙台藩白老元陣屋資料館発行

似ているようで、ちょっと違う  
違うようで、どこか似ている

三月十九日(土)から、いよいよ“歴史と文化のまちPR展”が開幕となります。これまで三月中旬から四月中旬までを会期としてきましたが、「白老町を大いにアピールする」という点を重視し、会期を町外からのお客様が増えるGW期間までを含めて大幅に拡張します。

今年のPR展のタイトルは『あなたと白老、わたしと白老』とひとりの白老町史』です。

これまで白老地域文化大学やしろおい歴史講座では、「元アイヌ民族博物館館長の中村齋氏を講師に“個人史”の編纂について学んできました。いきなり“個人史”なんて聞いても戸惑ってしまうかも知れませんが、一言で言えば、自分で自分の生涯を思い返し、他人にも伝わるようにまとめたものを指します。同じ白老町という地域で暮らしていても、家族構成・生業など、個々人の生活の背景は大きく異なります。これは、大きな箱の中に色とりどりのお菓子が入っている光景を想像すると解りやすいでしょう。しかし同時に、

この大きな箱が揺さぶられると、みんな揃って揺さぶられてしまいます。また逆に、中身によって箱に変化が現れることもありますよね。このように、私たちひとりの日々の日常と白老町の歩みは、気づかないところで強く絡み合っているものなのです。

例えば学事関連ですと、お子さんの入学式や卒業式の記念品・写真などが挙げられます。こうしたものも、やはり白老町と個人が関連した資料ですよね。ひとりの歩みが積み重なってこそ白老町ですからね。一方、生業では木彫りがあります。まさに白老町とは切っても切れない歴史的対象です。作品はもちろんのこと、製作に用いた道具も、郷土白老の変遷を顕すために欠かせません。

数例を挙げてみましたが、要は既に概括されたものとしてある『白老町史』と、住人であるみなさんとの関わりを、もっと近くに感じてほしいと考えているのです。白老町の歩みを、今以上に明らかにしたいという思いから、今年のPR企画が発案されました。

いくなれば、白老町民ひとりのひとりが、歴史と文化のまちの住人であると同時に、その表現者になってもらいたいのです。

展示に際して特にお手間は取らせません。思い当たる思い出の品をお報せいただければ、学芸員が仔細をつかがいに参ります。“歴史と文化のまち”白老をもっとPRすべく、ご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。



〈伊藤信吉氏が愛用した木彫工具(上)

と太島信也氏が愛用した木彫工具(下)

同じ道具でも、それぞれに…)



「あかりをつけましょ ほんぼりに」

「お花をあげましょ 桃の花 五人囃子の 笛太鼓 今日のはたのしい ひなまつり」

皆さん、この歌の題名を知っていますか？

答えは『うれしいひなまつり』です。楽しいと歌っているのに「なぜ、うれしい？」と思うかもしれませんが、四番の歌詞が「なにようれしいひなまつり」となっているからなのです。

さて、楽しくうれしい雛祭ですが、陣屋資料館では二月十一日(金)から、今年で四回目となる『麗しの雛人形展Part 4』を開催しています。

初日の十一日には、初めての試みとなる「雛人形製作体験」を実施しました。作り方は比較的小さいので、手の平に乗ってしまう大きさの可愛いお雛様です。参加者は、作り方を覚えようとメモをとるなど、とても熱心に作り組んでくださいました。会期中、完成作品の一部を展示しています。他の雛人形と併せてお楽しみください。

なお、初めての事業であったため、ご参加の方々には何かとご迷惑をおかけしました。また、定員を超えてしまったため、お断りさせていただきました。来年も「雛人形製作体験」を実施したいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

なお、雛人形展は三月三日(木)までの開催で、会期中は町民無料となっております。まだご覧になられていない方は、是非ご来場ください。また、二月二十七日(日)十一時から、恒例の「お雛様会」を実施いたします。参加費無料となっておりますので、皆さんお気軽に足をお運びください。



〈完成したお雛様〉



〈熱心に説明を聞く参加者〉

### 資料館に若武者あらわる!!

昨年、一昨年と萩野中学校において出前講座「鎧兜試着体験」を行なってきましたが、三年目を迎える今年には出前講座ではなく、資料館に萩野中学校のみんなが来てくれました。

資料館では大小の鎧兜を用意。試着は代わる代わる行なってもらい、全部で十二人の生徒さんに体験していただきました。試着した生徒さんは、やはり「重たい」などといった感想をあげていましたが、まわりの友達のリクエストをすると、重たさなんて何のその、興奮気味にポーズを決めていました。また、鎧兜を試着できなかった人たちには着付けを手伝ってもらい、それぞれ着る側、着せる側の体験ができたかと思えます。館内の展示解説や試着体験を通して、侍の歴史と文化について学んでもらいましたが、これをきっかけにわが町の生い立ちに対しても、より大きな関心をもってもらえればと考えます。



〈陣屋にいた武士たちも敵わない!〉

イケメン若武者参上!)

を一際、貴重品としていました。ご存知の通り、北海道では漆製品が作られませんでしたが、欠かせない交易品の一つだったわけですね。とはいえず、完全に既製品を輸入していたのではなく、型を彫り終えてから和人に渡し、塗装を施してから手に入れた場合もあったそうです。町内では特にアイヌ民族博物館で、昔から残されている漆塗りのイタンキ(お椀)・シントコ(行器)・エトウヌフ(片口)などを見ることができですが、実は陣屋資料館にも同様の資料が収蔵されています。伝承者であり詩人でもあった森竹竹市が、若い頃から熱心に収集した資料は、漆塗りの民具に限っても数十点は下りません。

また、常設されている資料としては、御備頭(おそなえがしら)三好監物旧蔵のシントコがあり、監物がアイヌ民族との親交を図るために贈ったと伝えられています。でもこのシントコ、贈ったならば何故、監物のご子孫がお持ちだったのでしょうか。また誰に、どのような時に贈ったのかも解っていません。今回は、ちょっと不思議な宝物の由来についてご紹介いたしました。



シントコ(奥)をはじめとした

漆器類

### 不定期シリーズ「陣屋再発見②」

“三好監物旧蔵の行器(ほかい)”  
かつてアイヌ民族の社会では、漆でできた製品

「仙台陣屋かわら版第七十三号 平成二十三年三月号」

発行日: 平成二十三年二月二十二日(火)

発行所: 仙台藩白老元陣屋資料館 担当者: 平野・干場